

1. はじめに

前職の NEC 時代から海外で活動する際の語学力を中心とした人材育成に課題を感じ当学会の活動に参加して10年を超える。自身の発表内容も含め今までの学会で聴講・学習させて頂いた内容は、現状を踏まえた場合果敢な挑戦ではあるが、その多くはグローバル人材育成の対象者が大学生であり、外国語が英語であったように思える。

2. これからの活動について

コロナで学習環境が変わるのに加え、国際状況が大きく変化する中、グローバル人材育成の対象と学び方を広げる活動を支援したいと考えている。先ずは以下4つの方向性を提言したい。

- ① 高校以降英語学習を継続する路線を留学等を明確に目指すタイプと観光産業等就労先で活用する実務タイプに多様化すると共に利用目的化し、必要とされる到達レベルの目安検証を推進する。
- ② 生成AIを利活用した学習は新たな挑戦であり、無暗に信頼し頼ることのないような学び方を指導者と一緒になって研鑽する。
- ③ 日本で就労・学習する外国人もグローバル人材である。その日本語教育が文科省で制度化・資格化推進される動きを加速化・充実化する日本語指導人材育成を支援する。
- ④ 高校以降の外国語教育においては地政学的近隣諸国や、世界における当該言語利用人口、自身の将来キャリア(スポーツ・音楽)のルーツ・指導者を意識した言語選択学習の機会を供与し、「つながり」の深さを学ぶきっかけとなる外国語学習を支援する。

3. 4つの提言の軌道修正について

本大会のテーマ「個人・組織・社会の Well-being

を目指すグローバル人材育成」に沿った発表内容に学ぶのは勿論のこと、令和6年12月25日開催された中央教育審議会(第140回)への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について:外国語教育について、小学校高学年の外国語科を導入する等、小学校から高等学校まで大幅に充実がなされた中、生成AIの活用を含め、今後の在り方をどのように考えるか。また、手軽に質の高い翻訳も可能となる中、外国語を学ぶ意義をどのように考えるか。」に対する進展も興味深く取り入れたい。

ただ方向性として少子化において現在の学習者や大学進学数を維持することは困難であり、外国人労働者・学習者を取り入れた学習空間への移行無くしては運営が難しい。諮問資料 p98[1]にある高校卒業時 CEFR A2 レベル到達 40.2%(平成30年時点)を小学校学習時間の追加や AI 活用による効果を期待しても、学習対象者全員が海外大学への留学や企業が求める実務レベル(目安として最低 B1 と考える)への到達は難しいと考える。

よって外国語=英語の思考を改め、異なった外国語も含めた二刀流にグローバル人材の道を探すべく他学会での活動を以下のように紹介し意見交換を図りたい。

- ① LNBTI における OPI c 適用評価プロジェクト進捗状況のご紹介(日本語教育学会)
- ② 高校生で英語以外の外国語を学ぶ学生の OPI c 独語体験(一般社団法人日本外国語教育推進機構<JACTFL>)

引用・参考文献

[1] https://www.mext.go.jp/content/20241225-mxt_soseisk01-000039447-03.pdf

(2024年12月25日参照)